建築家マックス・タウトの業績と生涯

田中　辰明

お茶の水女子大学 生活環境教育センター 名誉教授

㈱工文社　月刊建築仕上技術　2008年11月号より

寄稿

建築家マックス・タウトの業績と生涯

お茶の水女子大学生活環境教育センター
名誉教授　田中 辰明

はじめに

筆者は本誌2007年11月号(Vol.33 No.388)に「ブルーノ・タウトの業績と旧宅の保存事業」という報文を執筆したことがある。2008年7月に1920年代にベルリンで建設された6件の住宅団地がユネスコの世界文化遺産に指定された。この内4件はブルーノ・タウトが中心となって計画されたものである。これらは1.Gartenstadt Falkenberg(庭園都市ファルケンベルク) 2.Siedlung Schillerpark(シラー公園住宅団地) 3.Groβsiedlung Britz(Hufeisensiedlung)(ブリッツの大住宅団地(馬蹄形住宅団地)) 4.Wohnstadt Carl Legien(カール・レギュンの住宅都市)である。

ブルーノ・タウトは1933年に台頭してきたナチス政権を逃れ来日し、著作『日本美の再発見』、『日本文化私観』等を発表、桂離宮などを世界に紹介した建築家としてわが国にもなじみが深い。ブルーノ・タウトは日本文化を愛しながら失意のうちに日本を去っていかなければならなかった。「集合住宅を沢山設計したといえ、同じことの繰り返しだからたいしたことは無い」という辛口の評論家もいる中で、やっとブルーノ・タウトの業績が公に認められたことに成るわけで、眞に喜ばしいことである。

ブルーノ・タウトにはマックス・タウト(1884～1967)という実弟の建築家がいた。マックス・タウトは1884年当時の東プロシャの首都ケーニクスベルグで生まれた。3人の兄弟がいたが、長男は夭逝し、次兄のブルーノは1880年生まれなので4歳違いである。ブルーノ・タウトはナチス政権を逃れて日本にやってきて、ユダヤ人説が流されたが、これを否定する証拠として、実弟マックスが戦前、戦中、戦後とドイツで活躍したことがあげられる。マックスも早くから建築家としての才能を発揮し、1906年にはミース・ファン・デル・ローエと出会い、ドレースデンの展覧会に出展した独立住宅が金賞を取っている。1912年には兄ブルーノとオランダ旅行をしている。兄とは良く仕事を共にし、その影響を強く受けている。

写真1　旧ドイツ印刷業組合

例えば旧カールスルーエ中央駅はタウト兄弟の共同設計であった。従って作風には共通したところが多い。一方兄はベルリン住宅供給公社(GEHAG)の技師として集合住宅を沢山設計しているが、マックスは兄との競合を避けたのか、事務所建築、工場、学校、独立住宅を多数手がけた。1921年にはシカゴの新聞社シカゴ・トリビューン社の高層建築設計コンペに参加してる。

兄ブルーノは兵役を拒否し、暖炉の製造工場で勤務するが、マックスは1914年から18年の間兵役に服している。思想的には兄ブルーノと共通する点が多いが兄よりは柔軟に世の中を渡ったのであろう。

1．マックス・タウトの作品

1-1．旧ドイツ印刷業組合

1923年にはベルリン市のクロイツベルク(Kreuzberg)地区にドイツ印刷連盟の建物を設計し、内部の彩色は兄譲りのものであった。1924-26年に建設され、Dudenstr.10に存在する。これはフランツ・ホッフマン(Franz Hoffmann)との共同設計であった。建物自体は複合建築で道路に面する集合住宅と背後の5階建て印刷業建物からなる。2つの建物は低層の建物で接続されている

写真２　学校群（マックス・タウト学校）

写真３　Maz Taut Schule（マックス・タウト学校）看板

が、この結果、ほぼ正方形の中庭が存在することになる。低層階の建物を設けたことで住宅の日照の悪化と住宅から庭への眺望の悪化を軽減している。住宅は１戸当たりの居住面積が100㎡で各階18戸の住宅からなる飾り気の無い建物である。ブロック状のファッサードに深い開廊、ガラスの張られたパーゴラが設けられている。色彩に関しては黄色、赤色、黒色に彩色されたクリンカータイルが用いられている。印刷業の建物は鉄筋コンクリート造である。マックス・タウト、フランツ・ホッフマンの二人の建築家はコンクリート造の簡素さの中に美術文化を持ち込んだといえる。**写真１**に旧ドイツ印刷業組合の写真を示す。

１－２．学校群

ベルリン市のLichtenberg地区のNoldnerplatz, Schlichtallee, Fischerstr. に建つ。マックス・タウトがコンペで残した作品で1927, 1929-32年に建設された（**写真２**）。敷地も一辺が500mに及ぶ巨大なものである。小・中学校、職業学校、教育と文化センターなどがある。図書館、会議室もある。Max Taut Schule（マックス・タウト学校）の看板もあり（**写真３**）、マックス・タウトも兄ブルーノ・タウト同様に敬愛された建築家であったことが分かる。

１－３．消費協同組合の百貨店

ベルリン市クロイツベルク（Kreuzberg）地区のOranienplatzに建つ消費協同組合の百貨店。1932年にマックス・タウトの設計により建設されたが、百貨店としては数年しか使われず、事務所に転用された。L字型をし、５階と９階建。窓が多く、貝殻石灰岩板で外装を行う。１階の柱は細い。入り口にはMax Taut Haus（マックス・タウトの建物）と書かれている（**写真4,5**）。

１－４．旧ドイツ帝国鉱山労働者共済組合（Reichsknappschaftshaus）建物

旧ドイツ帝国鉱山労働者共済組合（Reichsknappschaftshaus）でベルリン市Wilmersdorf地区Breitenbachplatz 2にある。1929-30年に設計され、設計者はマックス・タウトとフランツ・ホッフマンである。L字型をし、３階建。ガラスを多用し、中から外の眺めを良くした。鉄骨の上に陶磁器の茶紫の外装を施した（**写真6,7**）。２つの建物を繋

写真４　消費協同組合の百貨店

▶ 写真５　入口には Maz Taut Haus（マックス・タウトの建物）の表示がある

げる階段が美しく、これがマックス・タウトの得意技である（写真８）。

第二次大戦で激しく破壊されたが、再建され現在はベルリン自由大學の建物になっている。

１－５．労働組合の事務所建築

ベルリン市ミッテ（Mitte）地区のWallstr.61-65, Inselstr.6, Markisches Ufer 32-34に建ちマックス・タウト、フランツ・ホッフマン、Walter Wurzbachの設計。Wallstr. とInselstr. 並びにUferstr. に囲まれた土地に建つ。RC造の典型的事務所建築といえる。外の柱間隔がそのままスパン間隔になり事務室を形成している。窓枠を始め様々な色彩が用いられている。７階にペントハウスがあり、建物の下を地下鉄が走る（写真９）。

１－６．ベルリン市ミッテ地区Michaelkirchplatz／Engeldammに建つ旧労働組合連合会の建物。

1927-30年に、ブルーノ・タウト、フランツ・ホッフマン、マックス・タウトが設計。発注者はドイツ交通連盟。1930年から労働組合連合会になった。当初の計画はブ

写真６　旧ドイツ帝国鉱山労働者共済組合（現在ベルリン自由大学）

写真７　旧ドイツ帝国鉱山労働者共済組合（現在ベルリン自由大学）

写真８　旧ドイツ帝国鉱山労働者共済組合の階段

ルーノ・タウトとホッフマンによって行われ、平面的にはほぼ４角形で中庭を持つ。５階建で各階のリザリト（建物前面の突出部）がある（写真10）。施工実施に当たりマックス・タウトが設計の変更を行い隅角部に丸みを持たせた。マックスはスパンを鉄筋コンクリートに経済的な物に変更している。会議室には「団結は新しい力を創

写真9　労働組合の事務所建築

写真10　労働組合連合会の建物

写真11　クロイツベルクの集合住宅

写真12　集合住宅の1階建半円形の突出した部分

造する」というレリーフがあったが1945年に破壊されている。ブルーノ・タウトの初期の設計は隅角部が直角であった。ブルーノ・タウトは「桂離宮は素晴らしい」とべた褒めする一方「日光東照宮はイカモノ、インチキ建築物である」と酷評するなど、物事をはっきりと判断する人であった。このような人は建物の隅角部は直交するのを好むであろうし、弟のマックスは兵役にも出かけてしまう程、柔軟な思想で生きた人である。マックス・タウトが隅角部に丸みを持たせるように変更したのもこの性格が現われたのではないだろうか。

1-7．集合住宅

ベルリン市クロイツベルク(Kreuzberg)地区のDudenstr. 12-20に建つ。1954-55年にマックス・タウトが設計し、建設された(**写真11**)。4−6階建てで、1階は商店が入っている。6階建ての建物は1925年にマックス・タウトが設計を行った旧ドイツ印刷業組合の建物に繋がっている。この奥に1-1の項で説明した10階建ての建物がある。4階建ての鉄筋コンクリート造の前に1階建半円形の突出した部分(**写真12**)があり、現在は町の図書館となっている。この半円形の部分が4階、6階、10階建ての3つの建物郡を纏める役割を果たしている。

写真13　ハンザフィアテルの集合住宅

写真14　グリニッケの狩の館(Jagdshloβ Glinicke)修復工事

1-8．ベルリン市ハンザフィアテルの集合住宅

ハンザフィアテルの集合住宅とはベルリンの中心部テイアガルテン地区にある住宅団地である。ドイツが第2次大戦で敗北し建設技術が衰微してしまったものを一挙に戦勝国の水準に引き上げようとして集合住宅の国際コンペを行い、世界の有名建築家に集合住宅を建設させたものである。コルビジェの作品"ユニテ"もあったが、余りに大きすぎ、敷地内に入らないので、オリンピック競技場の近くに建設された。ハンザフィアテルにはエゴン・アイアマン、オスカー・ニーマイア、アルヴァー・アアルトー、グロピウス、アルネ・ヤコブセン等当時の世界の有名建築家の作品が並んである。そこにマックス・タウトの集合住宅もある(写真13)。

1957年にマックス・タウトが設計したもので、高架鉄道(S-Bahn)のベレビュー(Bellevue)駅近くのテイアガルテンに建つ。HanseatenwegとBartingalleeの角である．低層住宅が並ぶ中にある3～4階建ての住宅である。隣にはデンマークの建築家Kay Fiskerの住宅がある。南北軸の建物で近くに建つEgon Eiermann, Oskar Niemayrの集合住宅と平行に建っている。東側に庭園が広がっている。マックスは兄ブルーノの生存中はあまり集合住宅を設計していない。偉大なる兄との競合を避けたのかもしれない。兄の没後にハンザフィアテルの集合住宅などに着手し、良い作品を残している。

1-9．グリニッケの狩の館(Jagdschloβ Glinicke)修復工事

ベルリンでもポツダムとベルリンの境にあるグリニッケというところに在る狩の館がある。ポツダムは旧東ドイツでこの館が建つのは旧西ベルリンであった。ポツダムとはヴァンゼー(Wannsee)という湖が境界となっていた。その上にグルニッケ橋という橋があり、東西ドイツの捕虜兵士の交換がこの橋の上で行われたことでも有名である。ベルリンの壁の崩壊に際しブランデンブルグ門を乗り越えて東の人々が西側になだれ込み歓迎を受けたのは記憶に新しいが、このグリニッケ橋を渡って旧西ベルリンへ入ってきた人も多かったのである。マックス・タウトはこのグリニッケの狩の館の改修工事を担当している。本来は1693年に極めて短期間の治世を行ったフリードリッヒⅢ世のために作られたもので、当初の設計はDiesartである。1860-1861年にFriedrich Karlの為に宮廷建築家Fedinand Arinimが改装をし、フランス風バロックを取り入れた。1889年にはAlbert Geyerが塔の改修を行っている。そして、1963年の改修をマックス・タウトが担当した(写真14)。マックスはガラスの出窓のある張り出しを作っている。現在この館の一部は地元の小学校としても使用されている。

2．マックス・タウト

兄ブルーノが1938年トルコのイスタンブールで死去するやトルコへ渡り、兄の仕事の後始末をしている。1944年までベルリンのアイヒカンプ(Eichenkamp)というブルーノとマックスの住宅の作品がある場所に住んでいたが、第2次大戦でこの住宅が焼失するや夫人の出身地であるベルリン郊外のコリーンに移住し、ここからベルリンに通って仕事をしている。コリーン(Chorin)という村はベルリン市の東北約50㎞のところにある。ブルーノ・タウトも弟のマックス・タウトも青春時代にこのコリーンを尋ね、湖と森で英気を養った。両兄弟ともコリーン

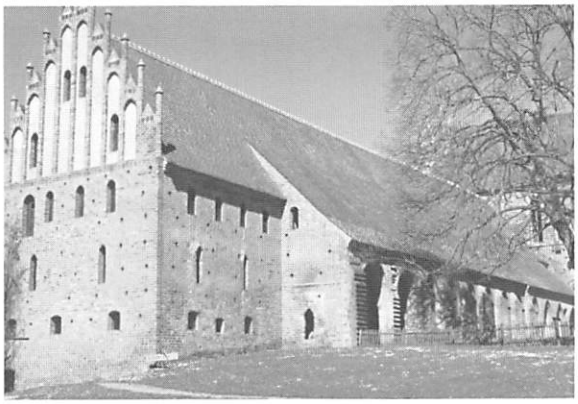

写真15　コリーンには中世の時代から修道院がある

写真16　コリーンの湖

の風景をパステル画にしている。コリーンには中世の時代から修道院(クロスター：Kloster)があった(写真15)。17世紀30年戦争が終わった頃から廃墟になったが、現在かなり修復が行われている。ここで鍛冶屋をしていた一族にヴォルガスト(Wollgast)家があり、クロスターシェンケ(Kloster　Schänke)という食堂も営業したそうで、酒も飲め、ダンスも出来るというので、若者に人気があった。ここには美しい湖がありブルーノもマックスもこの湖のパステル画を残している(写真16)。タウト兄弟もここに出入りし、店にも出ていた三女のヘートヴィッヒ(Hetwig Wollgast)とブルーノ・タウトは結ばれる。後に妹のマルガレーテ(Margarete　Wollgast)とマックス・タウトが結ばれる。タウト兄弟の夫人は互いに姉妹であったということになる。クロスターシェンケは現在経営者も代わり、建物も変わったが同じ場所に建って営業が行われている(写真17)。

写真17　現在のクロスターシェンケ

ブルーノ・タウトは1917年からエリカ・ヴィテイヒという女性と同棲し、1933年に日本にやってくる。エリカは正妻ではないが、当時の日本の報道ではこのような事は倫理道徳上良くないと考えたのかエリカをタウト夫人と書いている。エリカはタウトの仕事を十分以上に補佐し、トルコでタウト死去後もデスマスクと日本の重要人物との交換書簡を高崎の少林山達磨寺に届けるために来日している。そこでタウトの法要が営まれたが、エリカはその後、ドイツへ帰国、行方がわからないそうである。マックス・タウトは1945年にはベルリン芸術大学の建築の教授に就任している。1967年にベルリンで亡くなり、夫人の出身地コリーンの修道院内に埋葬された。マックスは生涯マルガレーテを伴侶として現在コリーンの修道院内ヴォルガスト家の墓地に共に眠っている(写真18)。墓石はマックス・タウトが設計したのか、基台と45度傾けて座り、他のヴォルガスト家の人々の墓より目立つ存在である。

写真18　マックス・タウトと妻の墓標

おわりに

ドイツに出張のたびにマックス・タウトの作品を写真に取り続けてきた。もっと早い時期にこの報文を纏めて発表しようと考えていた。しかし写真で撮影するのは簡単であるがこれを整理整頓し、文章を作成するということは極めて困難なことで時間が過ぎ去っていった。ブルーノ・タウトの作品がユネスコの世界文化遺産の指定を受けたのを期に実弟マックス・タウトの業績を整理した次第である。